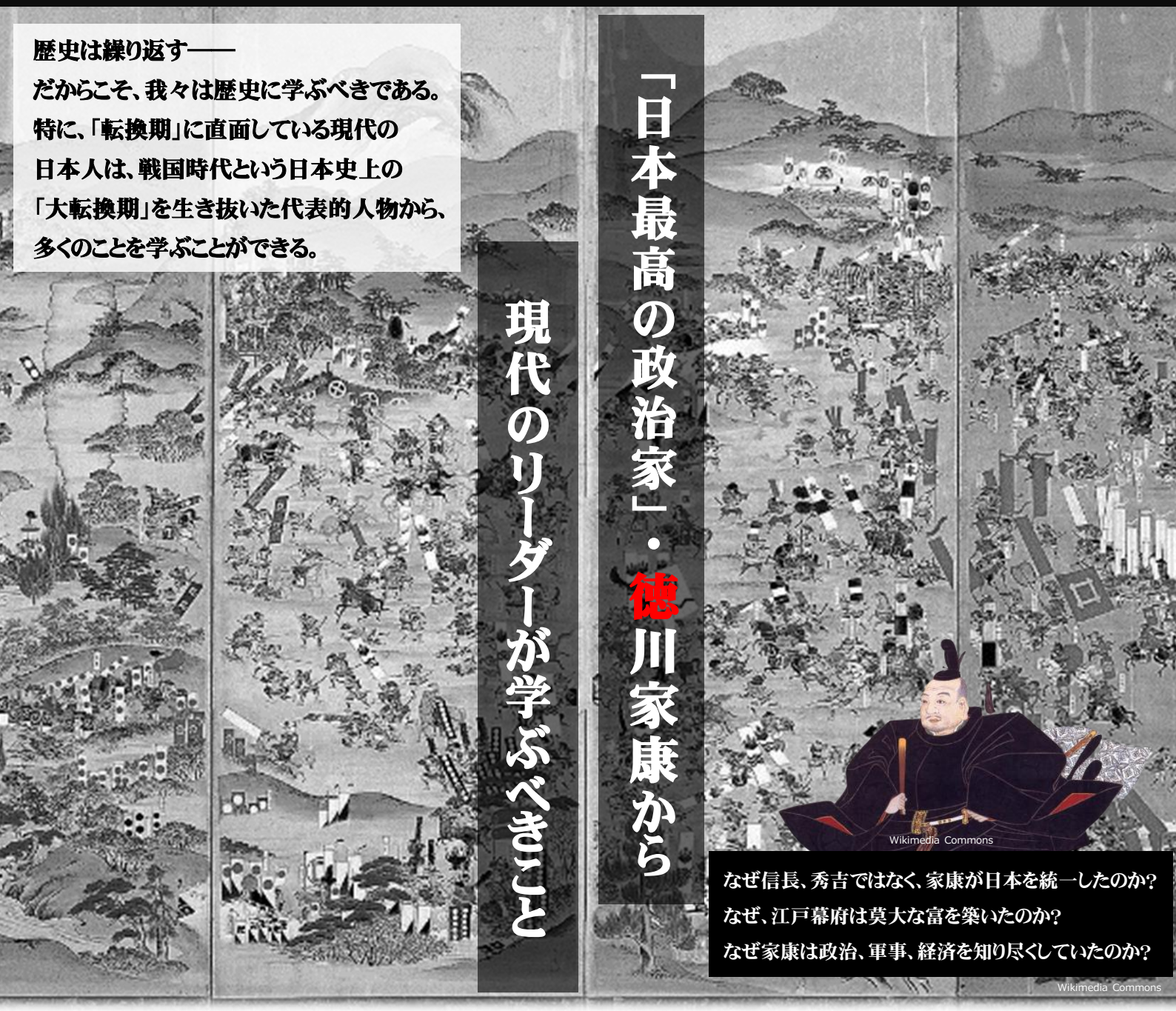
テンミニッツTV

10MTV
https://10mtv.jp/lp/v21/?referer=kamikura_sasshi

徳川家康を紐解く

神藏孝之
2023年1月



歴史は繰り返す――
だからこそ、我々は歴史に学ぶべきである。
特に、「転換期」に直面している現代の
日本人は、戦国時代という日本史上の
「大転換期」を生き抜いた代表的人物から、
多くのことを学ぶことができる。

「日本最高の政治家」・徳川家康から
現代のリーダーが学ぶべきこと

なぜ信長、秀吉ではなく、家康が日本を統一したのか?
なぜ、江戸幕府は莫大な富を築いたのか?
なぜ家康は政治、軍事、経済を知り尽くしていたのか?

本冊子は、小宮山宏先生（東京大学第28代総長）が提唱する「知の構造化」の一つの実践例として、作成しました。内容としては、主にテンミニッツ TV 内での山内昌之先生（東京大学名誉教授）、田口佳史先生（東洋思想家）、小和田哲男先生（静岡大学名誉教授）、片山杜秀先生（慶應義塾大学大教授）の講義などを参考にしてまとめております。ご一読いただけますと幸いです。

はじめに

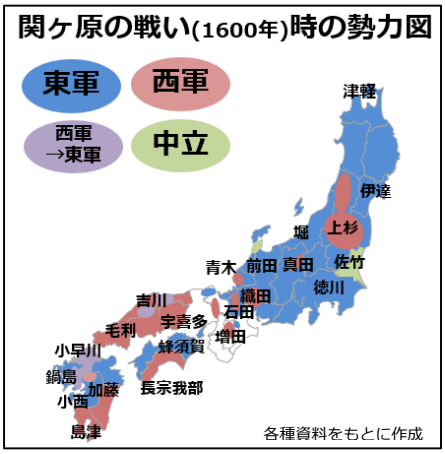
18 世紀半ばから続いた産業革命、20 世紀に起きた二度の世界大戦など、世界はこれまでに幾度となく大転換期を経験している。その中でも大きな転換期の一つが、16 世紀前後の時期だろう。

ヨーロッパでは、ルネサンスや宗教改革などにより、既存の価値観が 180 度転換し、新たな価値観が生まれていた。また、この時代は、スペインやポルトガルをはじめとした国々が、世界の各地に進出していった「大航海時代」にも属する。

宗教的な革命、科学的な革命、そして大航海時代――。それまで決して世界史の主役というわけではなかった西欧が、世界で大きなうねりを巻き起こし始めていた。

一方、16 世紀の日本は、断続的に内乱が続く「戦国時代」の真っ只中だった。鎌倉幕府滅亡以降、後醍醐天皇による建武の新政（1333 年）から 60 年以上も南北朝の争乱となり、さらにその後も騒乱が多い時代が続いた。建武の新政から応仁の乱（1467 年）まで約 130 年間と、応仁の乱から戦国時代を経て江戸幕府成立（1603 年）まで約 140 年間、合計 270 年近く、日本はまとまりがなく、大いに乱れていた時代だったといえる。

社会に対する不安や混乱が蔓延する戦乱の世では、未来に希望を持てない人が多かったに違いない。そのような状況を終わらせたのが江戸幕府である。大阪夏の陣（元和元年＝1615 年）以降は「元和偃武（げんなえんぶ）」が実現する。文字通り、元和元年以降、「武」は終わり、泰平の世が到来した。



Confidential

このように、国内外で混乱が続く中にあって、日本を統一し、平和維持を実現した人物こそ、織田信長、豊臣秀吉と並び「三英傑」と呼ばれる徳川家康である。家康は、多くの学者や政治家から「日本最高の政治家」との評価を集める人物でもある。

いま、日本は「転換期」の只中である。しかし、国が進むべき明確な方向性やビジョンを打ち出すことができていない。東洋思想家の田口佳史先生は、転換期のあり方について、以下の通り指摘している。

- 「転換」「成長」「安定」の 3 つのサイクルが繰り返しやってくる。
- 転換期に「良い転換」をしないと、成長期に「良い成長」にならない。そして、その後の安定期でも「良い安定」にならない。
- 転換は空気のようなもので、全ての人、全ての組織、全ての国家にやってくる。転換期を飛躍のチャンスにすることが大事。

そういった観点で日本史を振り返ってみると、戦国時代から江戸時代の転換期は実にうまく飛躍することができたといえる。

実際、江戸時代に日本は大きく進歩する。急激な人口増、積極的な新田開発、佐渡金山や石見銀山での金銀採掘、それに伴う経済発展――。この時代の資本の蓄積が、後の明治維新を起点とした近代国家の設立という大偉業の土台になったのはいうまでもない。また、この時代は文化・芸術などの分野も著しく発展した。地震などの自然災害や、飢饉、大火などの災難はいくつかあったものの、島原の乱の後は、とりわけ大きな反乱も内戦もなかった。

さらには、幕藩体制へと移り変わり、武断政治から文治政治への移行がなされ、武士階級の教育はそれまで日本ではさほど注目を浴びてこなかった儒教中心の内容へと切り替わるという、まさに歴史的な大転換、パラダイムシフトが起きた時代でもあった。

徳川家康は、そういう時代の礎を築いた。家康の性格を表す際、世俗的には狡賢くて腹黒いという意味で「狸親父」という表現がしばしば使われ、この言葉が一人歩きしてしまうことがよくあるが、それだけでは家康の全てを語ることはできない。彼の人生には激しい紆余曲折があり、そのさまざまな局面において、多様な顔を見せている。

この冊子では、家康を紐解くために、彼の功績や人物的特徴、エピソードなどに触れた上で、現代のリーダーが参考にポイントについて提示したい。

Confidential

①家康の功績

◆平和国家の成立をさせた ～①家康の功績～

家康の功績の第一に挙げられるのが平和国家の成立だろう。このことに関して、山内昌之先生は以下の通り評価している。

- 徳川家康の大きな役割は二つある。
- 一つ目は、「平和国家」をつくり上げたこと。江戸時代の日本は、270 年間にわたって内乱・内戦がなかった世界史的にも稀有な国である。
- 二つ目は、日本という国や国民が一つになったこと。中世における応仁の乱、戦国時代まで、日本は、東国と西国、つまり東と西が別の世界だった。

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（1）なぜ徳川家康は日本統一に成功したのか
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3836）

◆江戸や日本全体の成長に貢献した ～①家康の功績～

江戸時代以前は、一地方の町に過ぎなかった江戸は、家康が幕府の本拠として以降、急速に発展を遂げることになる。大都市・江戸は人口 100 万人を擁するまでになる。

そして日本全国で見ても、江戸幕府が成立した 1603 年の時点で約 1200 万人だった人口は、約 100 年間で 3000 万人へ増加する。それくらい大きな人口を抱えることができる国へと成長するための土台を築いたのが家康である。

江戸時代の急成長の背景には、圧倒的な「経済力」があった。家康は、国の安定のためには、経済や財政が大事だということを深く理解していた。そういった意味では単なる武の人ではなかった。当時の日本の経済を支えた 1 つが、金山奉行の大久保長安※を中心とした金銀採掘や、各地で積極的に行われた新田開発である。このことについて、小和田哲男先生は、以下の通り指摘している。

> ※**大久保長安**：武田氏滅亡後（1582 年）、武田氏の家臣から家康の家臣となった。のちに初代江戸幕府勘定奉行になる。

- 石見銀山や佐渡金山、出雲金山などから出てきた金銀が、幕藩体制の財政基盤をつくった。
- 各地の河川を補修し、合わせて新田開発をしていった。それによる収入も、かなり莫大になってきた。
- いわゆる「地方（じかた）経済」といって、それが相当大きな力を発揮した。

（小和田哲男　戦国武将の経済学（4）徳川家康の経済政策
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3245）

Confidential

また、山内昌之先生は、江戸の発展がその後の日本に与えた影響について、以下の通り指摘している。

- （江戸幕府が成立した）当時の江戸は戸数も少なく、人家もまばらであったにもかかわらず、江戸幕府の経営によって 1 世紀ほどのうちに 100 万人の人口を擁する大都会に成長した。いかに行政の中枢である江戸が大きな町であったかが分かる。江戸は、行政都市にして、かつ消費都市でもあった。
- 家康の都市計画と土木工事の見事さによって、埋め立てや上水道、下水道、公衆浴場、公衆便所、公衆などの整備がなされ、後に現在につながるメトロポリス東京となる基盤がつくられた。

> ※1800 年頃の北京の人口が 90 万人、ロンドンの人口は約 86 万人、パリの人口は約 54 万人、イスタンブールは約 60 万人。1700 年代には 100 万人を擁していた江戸がいかに世界的な都市だったかがわかる。

- 家康の江戸城は明治維新後、そのまま皇居となった。4 世紀を経ても現在の日本の首都の中心にある緑地として、心のやすらぎを都民、そして国民に与えている。
- 家康は江戸を中心とした「一つの国家」を築き、日本という国の一体性を工夫しながら創り上げた功労者といえる。
- また、江戸周辺の農民の年貢は北条五代の支配以来、低かったが、この伝統を受け継いで低率の税制をそのまま堅持した。その結果として、江戸周辺の農民からは家内制手工業が生まれ、それを農村から醗酵させることによって、実は外国から産業革命が到来する以前に早期近代化、早期産業化、あるいは原産業化、すなわち proto-industrialization を創り上げていくことになった。
- こうした日本自前の industrialization の原初形態は、その後の近代の産業革命の基盤を静かに準備したといえる。
- すなわち、こうした近代日本の工業化を準備した日本の近世は、家康のリーダーシップなしには出現しなかった。

（山内昌之　家康が築いた TOKYO（1）日本の近代化とリーダーシップ
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2150）

江戸時代の「農家」といえば、貧しい家を想像する人が多いが、実は非常に裕福な農家も多かった。例えば、幕末から明治にかけて活躍した渋沢栄一は、武蔵国血洗島村の藍の豪農かつ豪商の家に生まれている。江戸時代は渋沢家のような豪農も多かった。その背景には、上記のように家康時代から培われた産業の基盤形成が大きく関係している。

Confidential

◆巧みな外交戦略で国交回復を果たす ～①家康の功績～

さらに、山内昌之先生は、秀吉時代に断交した朝鮮や中国との国交回復を果たした点や、琉球王国との付き合い方の見事さ、さらに外交の多元化についても以下の通り指摘している。

- (豊臣秀吉は)朝鮮出兵という、まったく大義なき戦争に踏み込んでいく。そして中国(明)とも戦火を交えることになった。結果として、その後、数百年にわたって、彼らの中に怨念を培わせてしまった歴史的な責任は大変大きい。
- 秀吉は、古代から貿易・通商、外交・政治の関係で非常に重要だった中国や朝鮮との関係を悪化させただけじゃなく、断絶、切断してしまった。
- この国交を回復したのが家康であった。家康は朝鮮半島に出兵しておらず、徳川家は一兵たりといえども、朝鮮人や中国人と、刃を血塗らすことがなかった。そのため、住民たちに恨まれる要素を、直接的には作っていない。
- この幸運と偶然とが、その後、朝鮮の通信使の日本への訪問、つまり日朝の国交正常化につながっていく。

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（1）なぜ徳川家康は日本統一に成功したのか
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3836）

＜琉球王国との関係＞

- 1610 年、薩摩藩の琉球出兵によって琉球国王の尚寧が捕らわれて、日本に連れてこられるという事件があった。尚寧は駿府に隠居していた大御所の家康の元を訪れた。家康は駿府城の広間の上段において、互いに対座し向かい合うという形で対等の礼を取り、捕虜の屈辱を与えず一国の王として丁重に礼遇した。
- これは家康が東アジアにおける政治力学や地政学を正確に理解し、琉球を朝鮮と同じく中国（明）との接点と見なすという戦略的発想から来たものである。
- 明治になって政府は琉球処分によって、琉球の王朝・尚王家を皇族とせずに侯爵（marquis）に落とした。すなわち島津家が一段格の高い公爵（duke）であったのに対して、それよりも低い格の侯爵に落とした明治政府とは誠に異なる総合力の証というべきものが、家康のこうした態度に見えるといえる。

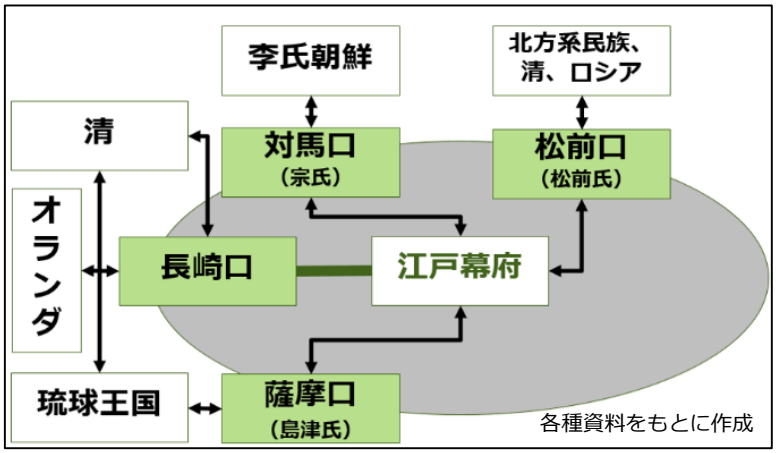
（山内昌之　家康が築いた TOKYO（1）日本の近代化とリーダーシップ
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2150）

＜4 つの口＞

- 外国との窓口を「口」と呼ぶが、江戸時代には対馬口、長崎口、琉球口、松前口という、

Confidential

外国との４つの窓口があった。その基盤は徳川家康が海外への認識をしっかりと持っていたことである。



- 豊臣秀吉も海外への認識は持っていたが、侵略とか、攻撃的な要素があった。それに対して、家康はどちらかというと、共存、協調という要素で海外への関心を持っていた。

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（2）海外への認識と基礎教養
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3837）

以上、世界的にも稀な平和国家を作り上げ、日本を飛躍的に発展させ、国交を回復させ、外交政策をうまく実行したという点で、政治の内政と外交で非常に大きな成果を挙げている。このことが家康の評価を著しく高らしめているといえる。

一流講師の講義動画で深掘りできます

山内昌之
徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編
(1) なぜ徳川家康は日本統一に成功したのか

山内昌之
徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編
(2) 海外への認識と基礎教養

山内昌之
家康が築いたTOKYO
(1) 日本の近代化とリーダーシップ

小和田哲男
戦国武将の経済学
(4) 徳川家康の経済政策

テンミニッツTV　検索

【参考】

◆家康と同時代の人物　<アンリ４世>

徳川家康と同時代に、世界でも多くの偉人たちが活躍していた。その中の１人がフランスのアンリ４世である。彼は、ブルボン朝の創始者として知られているが、宗教対立によるフランス国内の分裂を実質的に統一し、国家の危機を乗り越えて、平和をもたらしたという点で、家康と類似している点も多い。

家康が 1543 年に生まれ、アンリ４世は 1553 年に生まれた。家康が江戸幕府を開いたのが 1603 年、ブルボン朝の始まりが 1589 年である。そういった意味では、二人はほぼ同時代の人物といっても過言ではない。

日本では決して知名度が高いとはいえないアンリ４世だが、実はフランス国内では、ルイ 14 世、ナポレオン・ボナパルト、シャルル・ド・ゴールなどと並び、もっとも人気の高い偉人の一人に挙げられる。

アンリ４世は、ユグノー戦争（1562 年～1598 年）の混乱や、大国スペインの介入などによって、国家存亡の危機に直面していたフランスを救った。その危機の中で、幼少期からカルヴァン主義の教育を受けていたにも関わらず、国民の支持を得るために、カトリックに改宗までしている。最終的に「ナントの王令」によって、長年にわたる宗教戦争を終結させることができた。

※ユグノー戦争（1562 年～1598 年）：フランスで起きた新教派（プロテスタント）と旧教派（カトリック）による戦争。最終的に、国王アンリ３世、ギーズ公アンリ（カトリックの指導者）、ブルボン公アンリ（後のアンリ４世、プロテスタントの指導者）の三つ巴の争いになった＝「3 アンリの争い」。

※ナント王令（1598 年）：カトリックを国教と認めたうえでプロテスタントにも、宗教の自由など、さまざまな権限を認めた。宗教戦争の終結に重要な役割をもたらした。

また、財政家のシュリ（1560 年～1641 年）を用いて、長年にわたる内戦で崩壊寸前のパリの整備や財政再建を行うなど、卓越した政治手腕を発揮した。その他にも、カナダに植民してケベック市を建設し、ポルトガルやスペインに後れをとっていた対外政策も積極的に推し進めた。だが皮肉にもアンリ４世は、狂信的なカトリック教徒によって刺殺されるという悲劇的な最期を迎えた。

Confidential

②家康を読み解く

◆耐え難い苦労の中で忍耐力を身に付けた～②家康を読み解く～

「鳴かぬなら鳴くまで待とう時鳥（ホトトギス）」という句は、家康の性格を表す時に、引き合いに出されることがよくある。この表現は、織田信長と豊臣秀吉の二人と比較した場合、家康が際立った忍耐力を持っていたことを意味することが多い。

◆「家臣は家宝」という思いに隠された過去 ～②家康を読み解く～

家康の人質時代

織田家	6歳～8歳（1547年～1549年）	・今川義元の人質として駿府に行く途中、織田家に売られる。 ・父の松平広忠が暗殺され、今川家の軍師である雪斎和尚が、家康を奪回。駿府の今川家の人質へ
今川家	8歳～19歳（1549年～1560年）	・いじめも受けるが、雪斎和尚の教えにより、漢籍などの教養を身につける。 ・桶狭間で今川義元が敗死し、家康は戦地から岡崎に戻り、人質から脱出した。

各種資料をもとに作成

家康は今川家から独立した後に、大きな困難を経験することになる。三河一向一揆（1563年）と三方ヶ原の戦い（1572 年）である。三河一向一揆は苦労の末なんとか収めることができたが、その後の三方ヶ原の戦いにおける武田軍への大敗は彼の大きな挫折の一つとなった。しかし、この経験は彼自身の哲学に大きく影響を与えた。小和田哲男先生は以下の通り指摘している。

- 三方ヶ原の戦いでは、家康には 8000 人の部下のうち、1 割の 800 人の部下を失うという完膚なきまでの敗北だった。
- 敗北して逃げる時、何人もの家臣が自分の身代わりになり、昔でいう影武者として討ち死にしていった。
- それを知った家康は、自分は家臣によって生かされているのだという想いを抱き、だからこそ「家臣が大事だ」という信念が出てきて、徳川軍団が一枚岩の団結になる。
- 秀吉を前に五大老が集まって雑談をしている時に、秀吉から毛利輝元や前田利家などに「おぬしのところの家宝、宝物は何だ？」と聞いた際、毛利や、上杉は「うちにはこんなお宝があります」「名刀があります」「書があります」というように自慢が続いてい

Confidential

たが、家康は「うちは鎌倉以来の上杉氏のような古い家ではありませんので、そのような家宝はありません。ただし、私のために命を投げ打ってくれる家臣が 500 はいます。これが私にとっての宝です」と答えたという。

（小和田哲男　家康の人間成長～戦略性をいかに培ったか（3）三河一向一揆と三方ヶ原の戦いの教訓　https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4758）

◆どんなに年を取っても陣頭指揮を貫いた ～②家康を読み解く～

家康はあらゆる戦において、陣頭指揮を執っている。関ヶ原の戦い（1600 年）は、58 歳にして、主戦場の只中の本陣で指揮を執った。さらに、その後の大阪冬の陣（1614 年）では 72 歳、大坂夏の陣（1615 年）では 73 歳にして、陣頭指揮を執った。このことについて、片山杜秀先生は、以下の通り指摘している。

- 源頼朝は、源平合戦においても、平家と戦うために西に行かず、あくまで鎌倉にとどまって、そこから指令を出し、名代的な梶原景時、源義経や源範頼など弟を使って合戦をした。つまり、頼朝は肝心なところで、現場にいなかった。
- 「頼朝のほうが兄であり、偉く、鎌倉幕府の初代将軍で、鎌倉幕府を開いた。源氏は頼朝あってこそだ」という認識は歴史の中で共有されているが、ヒロイックなカリスマ性を弟が持ってしまうという形で、鎌倉幕府の誕生の物語はできてしまった。結局、源氏の物語は「義経＋頼朝」でないと機能しないような形になってしまう。
- 家康は、源氏と同じ轍を踏まないことを考え、年を取っても、頼朝のように江戸には残らず、率先して陣頭指揮を執った。
- 大阪冬の陣や大阪夏の陣も同じである。家康の他にも指揮できる人として、秀忠や、譜代の家臣、松平一族にも優秀な人がいたし、天下分け目の戦いというわけでもなかったので、家康は必ずしも大阪に行く必要もなかった。しかし、家康は陣頭指揮を執った。
- その結果、「その場に家康がいるから勝つ」というストーリーになり、家康のカリスマ性へと繋がった。
- このように家康は形式的に征夷大将軍になるだけでは足りないと分かっていた。
- 家康は、人生の中で、自分が常に危険な場所に立つことを意識していた。陣頭指揮を執って、部下が奮い立てば、弱小の軍隊でも最大限の力を発揮できる。これは、織田氏などの後塵を拝してきた徳川の気風でもある。

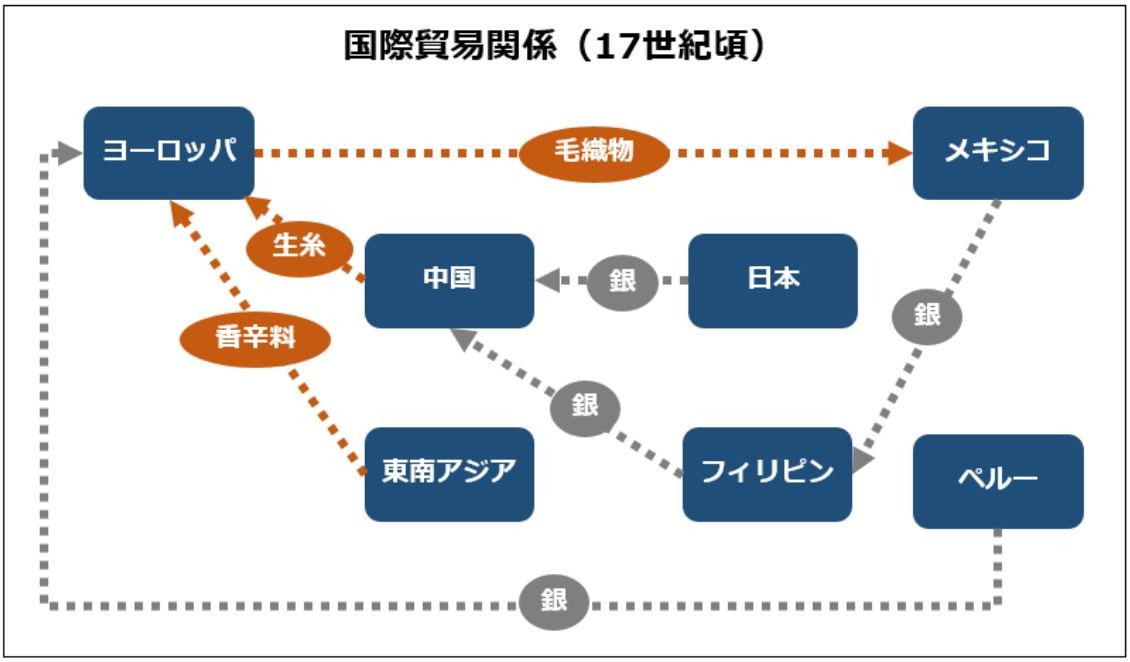
（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論（1）率先し陣頭指揮する https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4726）

◆経済や海外に対する深い理解があった ～②家康を読み解く～

家康は、なにより経済の重要性を理解していた。

Confidential

当時、相互に依存し合っていた国際貿易関係の中で、世界的な「銀不足（＝通貨不足）」が起きていた。そこで多くの国が、危機的な経済状況に陥り、国内産業保護の路線へと切り替えていった。そのような世界情勢の中で、江戸幕府も「鎖国（＝国内産業保護）」の方向へと舵を切る。このような判断ができたのは、ウィリアム・アダムスやヤン・ヨーステンなどのブレーンたちから、海外情勢について学んでいたことが大きい。



荒巻豊志,『荒巻の世界史の見取り図 文明発祥～16 世紀』,株式会社ナガセ,2006 年 12 月,P232 をもとに作成

同様に、長期的な安定政権確立のために、さまざまな仕掛けを施していた。小和田哲男先生は、家康の先見の明について、以下の通り指摘している。

- 江戸時代は、たしかに三代将軍・徳川家光の後からは「鎖国」になるが、厳密にいうと、幕府による貿易独占だった。つまり、諸大名たちが海外貿易のうまみにあずかれないように規制をかけ、幕府だけにその権限や権力を集中させるようにした。
- これは、家康自身が経済をそういう形で治めたからで、このことが徳川幕藩体制が 260 年ほどの長期安定政権をつくった理由である。
- 関ヶ原後は、徳川幕府の家康直轄地が約 400 万石。それ以外にも、徳川系の譜代大名の土地は、かなりの石高になっていた※。（徳川家以外で）江戸時代最大の石高は加賀前田の 100 万石と言われるが、完全に、誰も徳川（将軍）家を倒すことができないような力関係になっていった。

※幕府直轄の 400 万石と、旗本分などの 400 万石を合わせれば、江戸幕府の石高は実施的に 800 万石に上る。

Confidential

- 戦争はないけれども、経済的にダントツの 1 位でいることで長期安定政権をつくったという、家康の先見の明、先を読む力は大きかった。

（小和田哲男　戦国武将の経済学（4）徳川家康の経済政策
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3245）

＜外国への理解＞

また、家康は当初、世界のトップランナーでもあったスペインとの交易を積極的におこなっていたが、徐々にスペインとは距離をとるようになる。これは、スペインが国家戦略として、キリスト教布教を通じた侵略を目指していることを恐れたからである。家康はすぐさま方向転換し、キリスト教布教を目的としていない国家・オランダとの交易に切り替えていった（1624 年にはスペイン船の来航禁止）。

- 日本には、鉱山技術は確立したものがなかった。そのため、スペインに対して、「キリスト教布教は認めるが、その代わりに貿易や鉱山技術の技術移転をするように」と申し入れた。だがスペインは、主要技術は日本に教えようとしなかった。その割には、どんどんキリスト教を布教していた。
- その次に、ベンチャー国家として台頭してきたオランダと付き合うことにした。オランダは貿易立国であり、宗教を通じた侵略の危険性も低かった。また、軍事技術では世界一だった。
- ちょうどこれから、大阪冬の陣、夏の陣が始まるときに、オランダと組んで、世界の最先端的な武器を取り入れて、大阪冬の陣では、ものすごく効果があった。オランダからきた大砲が、射程距離が 500m あったので、弓矢や鉄砲でも応戦できなかった。

（田口佳史　徳川家康：各論③ https://youtu.be/179h2chgiEM）

＜安全保障観＞

中国や北朝鮮、ロシアなどの国々に囲まれている現在の日本の平和は、いつ脅かされてもおかしくない。国家の安全保障という観点でいえば、江戸時代初期の日本は参考になる。というのも、家康が天下を取る以前の日本は、秀吉による文禄の役（1592 年～1593 年）や慶長の役（1597 年～1598 年）なども影響し、朝鮮や明との関係性は最悪というべき状態だった。そういった意味では、江戸時代初期の日本の安全保障問題は、現在とは比べ物にならないくらい、緊張感があったに違いない。

山内昌之先生によると、家康は外交や安全保障においては決して油断してはならない、ということを指摘していたという。

- 家康は、「唐船（中国の船）と戦うには、鷹に鶴を捕らえる心掛けがなければ勝利はお

Confidential

ぼつかない」と述べている。

- かみ砕いていうと、例えば、鶴を多く捕るために、大変優れた鷹を仮に 1000 居（すえ）用意しても、それを指揮する鷹匠が下手ならば、鶴を捕ることはできないということである。鶴を捕えるためには、常に「より」（鶴を捕らえる仕掛け、また軍事でいう前進拠点）をつくって、肉をそこにうまくあてがって、そして適切な場所を定めることなどが必要である。
- つまり、日本の船がどれほど勇気凛々としていたとしても、普段からきちっとした覚悟、気構え、用意をしておかなければ日本の船は唐船に勝つことはできないだろうと言っている。
- また、三河、遠江、駿河という「三州」を支配した時は「近国に用心せよ」と言っていた。近国とは、甲州の武田や関東の北条、尾張以西の織田信長のことである。それから、「関八州」に移された時には、「東海道」「東山道」「北陸三道」という地域で政治がうまく治まっているか、それとも乱が起こっているかを常に考えた。
- さらに、家康が日本全体の主になったとき、家康は諸国が治まっているか、あるいは乱れているかどうかを考えるようになった。
- 日本人は自分たちが平和である場合、異国が乱れていても、ともすれば油断しがちだが、「油断するのは、大変禁物だ」ということを示唆している。
- 家光は、「長崎にいる唐船は、懐中の毒蛇だ」と指摘している。安全保障という観点から見ると、唐船は、我々が自分たちの懐の中に入れている毒蛇に他ならないという非常に厳しい見方をしている。いずれにしても、油断してはいけないということ。

（山内昌之　日本の外交防衛政策…家康の教訓
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4810）

＜幕藩体制へ＞

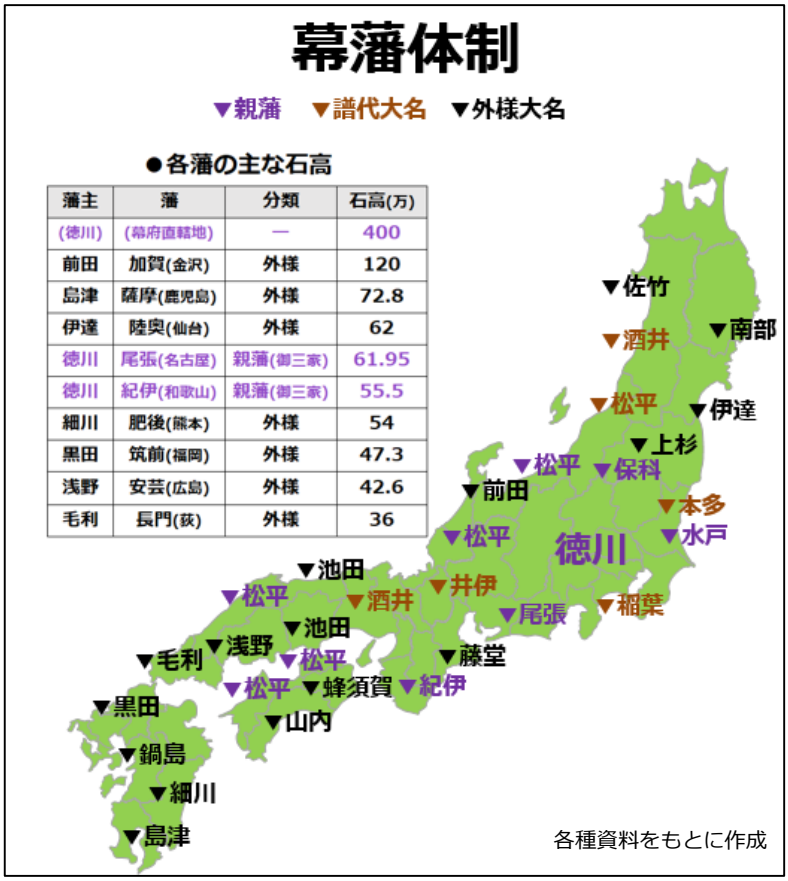
片山杜秀先生は、江戸幕府が「地方分権」という形をとることで、秀吉と同じ轍を踏まないようにしようと考えたと指摘している。

- 白村江の戦い（663 年）の後、日本が中央集権体制を作って、国力を総動員して防人で西日本の海岸線を守って、国際的な戦争に備えるという形で、律令体制が固まっていく、というのが日本の歴史。
- 秀吉は国内統一の後は、明まで支配しようとして、戦争を拡大し、中央集権化のための国家総動員体制を作った。豊臣体制が続いていれば、律令時代の中央集権的・公地公民的な政治体制のようになったのではないか。
- 石田三成は官僚で五奉行の筆頭の力を持っていて、総動員のための官僚機構の整備し

Confidential

たり、いろいろなデザインをした。豊臣時代は、官僚のトップの方が、大名よりも実力を持っているという政治体制ができかかっていた。

- 家康は、「封建」でそれぞれの大名の土地の権利を守りながら、最低限の中央官僚組織をもって国家を治めた。
- 秀吉のように中央から「兵隊を動員しろ」と命令するような官僚制にはしなかった。
- 秀吉や石田三成の官僚を潰すのが、関ヶ原の戦いでもあった。幕府は官僚組織だが、中央集権ではない。基本的にそれぞれの藩に任せ、その代わり、幕府を裏切らないように、参勤交代や武家諸法度で監視したりした。
- 朝鮮出兵で、散々な目に遭ったということで、関ヶ原の戦いの時に、秀吉の子飼いの武将たちまで、みんな家康側につくというのは、石田三成のようなやり方に反対していたからだろう。



藩主	藩	分類	石高(万)
(徳川)	(幕府直轄地)	—	400
前田	加賀(金沢)	外様	120
島津	薩摩(鹿児島)	外様	72.8
伊達	陸奥(仙台)	外様	62
徳川	尾張(名古屋)	親藩(御三家)	61.95
徳川	紀伊(和歌山)	親藩(御三家)	55.5
細川	肥後(熊本)	外様	54
黒田	筑前(福岡)	外様	47.3
浅野	安芸(広島)	外様	42.6
毛利	長門(萩)	外様	36

（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論（1）率先し陣頭指揮する
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4726）

◆仏教ではなく儒教を積極的に活用した ～②家康を読み解く～

また、片山杜秀先生によると、家康は、統治において「この世」を重視する儒教をうまく活用したという。

- 鎌倉幕府は、仏教とりわけ禅宗を重視した。その前の平安時代も、仏教を重視した。聖武天皇の時代も、仏教による鎮護国家を目指すという方向だった。聖徳太子も仏教を重視していた。
- 日本には、漢字が入ってきた時期と同時期から、儒教もあり、論語もあったが、家康の時代まで、政治と深く結びつくことはなかった。

Confidential

- 古代から、儒教と道教は日本に影響を与えてきたのは事実だが、仏教や神道と比べると、メインではなかった。
- ところが家康は、武家の学問として儒教を重視した。武士の学問も儒教だから、藩校などでも、儒教を読ませた。
- ちなみに、日本では古来、孟子は読ませない伝統だった。これは、孟子の思想は、革命思想に繋がり、下剋上になりかねず、危ないからであった。

（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～その指導者論・組織論（4）家康と儒教
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4729）

田口佳史先生によると、儒教の基本は親孝行の「孝」だという。そして、「孝」の実践者であり、近江出身の儒学者である中江藤樹（1608 年～1648 年）が、シンボルスターとなって、儒教を普及させたという。象徴的な人物をシンボルスターとして掲げて、社会的価値観を変容を加速させていく江戸幕府のやり方は実に見事だといえる。

- 「修身斉家治国平天下（しゅうしんせいかちこくへいてんか）※」という言葉がある通り、両親をとても敬って、とても大切にする孝行息子がいると、家庭は円満になる。こういう円満な家庭が多くなるのが、（より良い）社会であり、国家である。
- 「孝行」を国家にシンボルにしたというのはすごいこと。また、その時に、シンボルスターが重要。

※《「礼記」大学から》天下を治めるには、まず自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、次に国家を治め、そして天下を平和にすべきである。

- そこで、中江藤樹が出てくる。彼は、農家出身だったが、武士だった祖父の家を継ぐことになり、どんどん出世していった。
- 27 歳で、母親が病に伏せて寝てるとなれば、母親孝行のために脱藩までして、京でほとぼりをさまして、（母親がいる）近江に戻ったという。自分の身よりも母親の孝行をするほどの人だから、シンボルになることができた。
- 孝行者を社会から出して、彼のような典型例をどんどん作っていくと、幕府が親孝行者を表彰するようになった。

（田口佳史　徳川家康：各論③ https://youtu.be/179h2chgiEM）

◆卓越したデザイン力とストーリー構築力 ～②家康を読み解く～

また、家康の「デザイン力」と「ストーリー構築力」は、注目すべき特徴である。例えば、片山杜秀先生によれば、幕府を江戸に置いたことは大きな意味があったことが分かる。

- 室町時代は、足利氏の中でも、北朝と南朝に分かれて戦うという滅茶苦茶なストーリー

Confidential

になる。足利氏は、誰が一番偉いのかが曖昧で、どこに力が集まっているかを演出できないまま終わった。室町幕府のデザイン、ストーリーや朝廷の使い方などが曖昧だったのでうまく行かなった。

- 室町幕府は、朝廷との関係性も曖昧になっていった。室町幕府の第 8 代将軍足利義政（よしまさ）などのように、公家化、皇族化していく将軍もいた。
- 鎌倉幕府の第 3 代将軍・源実朝（さねとも）のように、鎌倉で雅を求めるのは、京都との距離感があるので、まだよかった。しかし、その実朝も最終的には殺された。
- 室町幕府の将軍の場合は、京都にいて、雅の文化を模倣しようとするので、武家の独自性を失って、統治もうまく行かなかった。
- 権威と権力の関係性を考えると、京都の室町にあった室町幕府は、朝廷のすぐそばにあったが、家康はそういうことを避けた。
- 家康は、空間的に分けて別だとはっきり示すことで、武家政権が別の力だと示す政治プロセスを作った。

（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論（1）率先し陣頭指揮する https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4726）

＜「徳川」という名の意味＞

日本のような島国で名門の生まれであるかどうかは非常に重要である。家康は 1567 年に松平姓を徳川姓に改姓するが、この決断がその後の徳川将軍体制をつくる上で重要だった片山杜秀先生は指摘している。

- 家康は、松平家の先祖は、実は得川※だとして、松平姓から徳川姓になった。

※得川：「えがわ」と読むが、「とくがわ」とも読む。

- 得川氏は、新田義貞などの新田の一族であり、家康はこの改姓によって、「自分が源氏の名門・新田氏の子孫新田義貞の一族」ということを示したかった。
- 「得」を「徳」という漢字にしたのは、家康が儒学に興味を持っていたからかもしれない。先祖は「得」だが、「徳」を使うことによって偉そうに、立派な人に見える、ということで漢字を変えた。
- 「徳のある川」というのは、羽柴とは違う。昔から徳川という姓があったかのようにして、イメージアップを図った。
- 徳川氏の当主になれるところだけを、徳川姓を与えて、残りの親族は、実の息子でも松平のままにした。これは皇室をモデルにしている。
- 皇族でも親王、つまり天皇家の跡継ぎになれるものに相当するのが、徳川姓。さらに、

Confidential

御三家（尾張と紀伊と水戸）や吉宗が作った御三卿（田安と清水と一橋）がある。このように、本家に男がいなかったとき、代わりに将軍になれる家をつくっている。

- 吉宗は御三家の紀伊から、慶喜は御三卿の一橋から出てきた将軍である。徳川本家＋御三家＋御三卿で合計七家あり、その他にも松平家もたくさんあるという形のデザインを家康はつくった。
- 徳川家の御三家、御三卿は、天皇で言うところの宮家。このように、朝廷をパクるという大胆なやり方をした。天皇と同じやり方と仕掛けによって、徳川家が偉く見えてくるようになる。

（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～指導者論・組織論（3）徳川と松平、御三家と御三卿
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4728）

＜厭離穢土欣求浄土＞

また、家康は複雑な言葉や表現で物事を伝えるよりも、効果的なキャッチフレーズを用いて、人々に周知させることに長けていた。「厭離穢土欣求浄土（おんりえどごんぐじょうど）」というキャッチフレーズはその最たる例といえる。田口佳史先生は以下の通り指摘している。

- 「厭離穢土欣求浄土」という言葉は、もともとは、恵心僧都源信（えしんそうずげんしん、942 年～1017 年）の『往生要集（おうじょうようしゅう）』の中にある言葉だった。
- これは、「みんなが死んでから極楽浄土に行くのでは遅い」「極楽浄土をこの世につくろう」というキャッチフレーズだった。
- 厭離穢土欣求浄土は、家康にとっては古いもので、家康の松平家三代信光という人が、たまたまこれを旗印に使ったという。

（田口佳史　徳川家康：各論③　https://youtu.be/179h2chgiEM）

＜この世でもあの世でも最高の神格を持つ＞

さらに、家康が自身の死後、天照大御神（あの世）と天皇（この世）を超越する「東照大権現」となることで、その後の地位を確実なものにしようとしたと片山杜秀先生は指摘している。

- 家康は、死後に「東照大権現」となる。これはブレーンだった天台宗の僧侶の天海の政治思想によれば、「天皇よりも偉く、天照大御神を超えている」ということ。
- 「権現」は、本地垂迹説の中で、仏が日本の上に姿を変えて現れたものとされる。
- しかも、密教系の思想では、神々の世界（あの世）と、現実の世界（この世）の両方に

Confidential

影響を及ぼしているのが最高に偉く、それを実践するのが大権現だという考え方もある。

- ということは、「この世を見守っているが、この世に直接的に影響力にない天照大御神」や「神々の子孫として京都にいて権威や格式を持っているが、あの世と直接繋がっていない天皇家」より大権現が偉いという理屈になる。
- 徳川家の始祖として大権現という神になって、日光や久能山から見守る。
- 特に、日光は江戸の真北の位置にあるが、真北、北極というのは道教では天皇のこと。だから、象徴としては天皇に成り代わっている。
- この世を実力で治めているのは徳川家。そして、あの世に大権現として家康もいる。だから、徳川家は偉いという理屈でもある。

（片山杜秀　徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論（2）徳川将軍家が最上位に立つデザイン
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4727）

一流講師の講義動画で深掘りできます

小和田哲男
家康の人間成長～戦略性をいかに培ったか
(3) 三河一向一揆と三方ヶ原の戦いの教訓

片山杜秀
徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論
(1) 率先し陣頭指揮する

片山杜秀
徳川家康の果断と深謀～指導者論と組織論
(2) 徳川将軍家が最上位に立つデザイン

片山杜秀
徳川家康の果断と深謀～指導者論・組織論
(3) 徳川と松平、御三家と御三卿

片山杜秀
徳川家康の果断と深謀～その指導者論・組織論
(4) 家康と儒教

テンミニッツTV　検索

Confidential

③家康から学ぶべき点

◆人質時代に身に付けた基礎教養 ～③家康から学ぶべき点～

リーダーにとって、基礎的な常識や教養は欠かせない。家康は、どんなに過酷な状況でも、それらを学び続けることを怠らなかった。このことについて、山内昌之先生は、以下の通り指摘している。

- （人質時代に）臨済宗の禅僧であった太原雪斎に出会う。太原雪斎は今川義元の軍師でもあり、政治のブレーンでもあり、かつ知的な駿府の文化を高めることに貢献した人間。
- この太原雪斎のもとで、家康は基礎的な、禅はもとより、仏教学や、あるいはそれを通した中国の漢籍や、四書五経を始めとする古典を勉強する機会を得た。
- 基礎教養としてはおそらく、信長・秀吉・家康を比べたら、誰よりも高いのは家康。
- しかも彼はその駿府で、茶の湯から和歌をはじめとする文化、素養について、一通りの訓練を受けた。贅沢をしている秀吉、それから茶の湯や茶器などに目の色を変えた信長と比べると、どうしても茶とか文化に対して、家康はあまり目立った印象を与えないが、和歌や連歌などをそれほど好きではなかっただけ。そういった文化の素養はあった。
- 駿府にいた時代は、彼自身を政治家として高からしめていく、何よりもリーダーとして人を率いていく基礎、基礎教養、人を説得していく材料を、たくさん身に付けた。

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（2）海外への認識と基礎教養
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3837）

◆家康はリベラルアーツを武器として使いこなした ～③家康から学ぶべき点～

- 例えば、目立たないことだが、徳川家康が江戸幕府を開いて最初にやったのは、「武家諸法度」という、武家を統制していく法律と、「禁中並公家諸法度」という、朝廷、天皇、あるいは公家に対してコントロールしていく法律の整備だった。
- そのときに、いろいろな前例、等々を知らなければいけない。そこで、『貞観政要』、『群書治要』といったようなものをはじめとする中国の文献だけではなくて、日本の『禁秘抄』という順徳天皇等々が関係したような文献も読んだ。
- さらにずっと遡っていくと、『日本書紀』や、『続日本紀』等々の『六国史』をはじめとして歴史書などにも、彼はたくさん関心を持って読んだ。

Confidential

家康が参考にした主な歴史書

吾妻鏡	鎌倉時代の将軍記(1180年～1266年、源頼朝～第6代将軍・宗尊親王)
貞観政要	中国・唐の時代に編纂された太宗の言語録
群書治要	中国・唐の時代の初期につくられた政治の参考書
禁秘抄	順徳天皇がつくった有職故実の解説書(1221年頃)
六国史	古代日本が編纂した以下６つの正史。 日本書紀(720年)　続日本書紀(797年)　日本後紀(840年) 続日本書後紀(869年)　日本文徳天皇実録(879年)　日本三大実録(901年)

各種資料をもとに作成

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（3）写本と文化の維持
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3838）

◆優秀な部下、ブレーンの存在が家康を支えた ～③家康から学ぶべき点～

家康には、信頼できる部下が多数いたことはよく知られている。特に、「四天王※」と呼ばれる４名の武将（「井伊直政（いいただまさ）」、「酒井忠次」（さかいただつぐ）、「榊原康政」（さかきばらやすまさ）、「本多忠勝（ほんだただかつ）」）は有名である。その他にも、「伊賀越え※」で活躍した服部半蔵など、多くの人材を抱えていた。

※家康の四天王：田口佳史先生（東洋思想家）によると、家康は、『貞観政要』に学び、「四天王」を置いたとされる。

※伊賀越え（1582 年）：本能寺の変の後、家康が本国に帰国する際のできごと。伊勢から三河へ渡る道が最短だったが、その場合、伊賀を越える必要があった。家康一行（約 34 人）は、道中に一揆などに遭いながらも何とか帰還することに成功した。

さらに、家康は、50 歳を超え、戦乱の世が落ち着いてきた後から、世の中のことについて、より一層深く勉強し始めたという。秀吉に代わり、自分が本格的に天下を治めるために、ブレーンを固めていった。

というのも、政治、経済、金融、ビジネス、軍事、国際情勢、宗教、哲学、歴史など、リーダーにとって、知らないといけないことが世の中には多すぎるほど存在する。そして家康は、それらのことを全てを自分一人だけで網羅することは不可能だと、深く理解していた。そのため、自分の近くに優秀なブレーンとして多種多様な人材を置くことで、情報収集や分析、言動、意思決定の質を高めることを考えた。

仏教の僧でいうと、天台宗の僧である南光坊天海や、臨済宗の僧である金地院崇伝が有名である。儒学者では、藤原惺窩（ふじはらせいか）の紹介で出会った林羅山が最も有名であ

Confidential

る。

また、1600 年に豊後国で漂着した外国船リーフデ号の航海長のウィリアム・アダムスや、船員のヤン・ヨーステンを厚遇し、海外事情の詮索に努めた。

さらに、三方ヶ原の戦い時より家康に仕えている豪商の茶屋四郎次郎（初代）や、江戸幕府勘定奉行だった大久保長安、彫金師の後藤庄三郎などが、家康をさまざまな面でサポートした。

山内昌之先生も、家康の人材登用のうまさについて、以下の通りしている。

主なブレーン・部下たち

- 初代茶屋四郎次郎（1572年頃～）
- 大久保長安（1582年頃～）
- 後藤庄三郎（1593年頃～）
- 天海（1599年頃～）
- ウィリアム・アダムス（1600年頃～）
- ヤン・ヨーステン（1600年頃～）
- 林羅山（1605年頃～）
- 以心崇伝（1608年頃～）

※茶屋四郎次郎：3 代目茶屋四郎次郎（清次）は、1612 年、朱印船貿易の特権を得て、莫大な富を築き、幕府初期の財政に寄与。しかし、1635 年の鎖国令（中国・オランダなど外国船の入港を長崎のみに限定）以降、次第にふるわなくなった。

- 天海や、崇伝、儒学者の林羅山など、それぞれ家康のブレーンでもあったし、政治のある部分に参画した。
- 家康にはそのような人材登用のうまさがある。外国の人材では、ウィリアム・アダムス（三浦按針）というイギリス人、ヤン・ヨーステンというオランダ人などを登用した。
- さらに、茶屋四郎次郎というような豪商もいた。金座などをつくる後藤庄三郎もいた。後藤庄三郎は、金（大判や小判）に刻印を打つ職人であり、金座の当主になった人物である。

（山内昌之　徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編（4）人材登用のうまさ
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3839）

このように家康の数々の功績や決断は、一様に、彼自身の実体験や、学問・教養により、形作られているものが多い。リーダーは、自らの才覚や経験のみに頼っているだけでは、信長や秀吉のように、いつかは限界を迎えることになる。家康のように、どのような環境下でも学び続けることを怠らず、習得した学問や教養をうまく使いこなし、優秀なブレーンたちを常に近くに置くなど、自ら積極的に学ぶ姿勢を生涯貫くことは、長期的な成功を導くための鍵だといえるだろう。

以上

Confidential

テンミニッツTV

https://10mtv.jp/lp/v21/?referer=kamikura_sasshi

一流講師の講義動画で深掘りできます

山内昌之
徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編
(3) 写本と文化の維持

山内昌之
徳川将軍と江戸幕府の軌跡～家康編
(4) 人材登用のうまさ

テンミニッツTV　検索

「徳川家康」に関連する一流講師の講義動画

なぜ「父祖の遺風」がローマと江戸に共通する価値観なのか

ローマ史と江戸史で読み解く国家の盛衰
(1) 父祖の遺風(全8話)
対談 | 本村凌二／中村彰彦

1200年に及ぶ古代ローマ史と、260年以上続いた江戸時代。この二つの歴史は、国家や組織について学ぼうとする者には宝の山である。本シリーズは、古代ローマ史がご専門の本村凌二氏と江戸時代を中心に執筆活動を行う中村彰彦氏の対談により、その勃興から衰退に至る歴史を、さまざまな角度から比較していく。

パックス・トクガワーナを築いた徳川家康の大胆さと慎重さ

徳川家康のリーダーシップ
(1) 大胆さと慎重さ(全2話)
山内昌之

独特の経済感覚、文化人としての側面など、徳川家康にはさまざまな逸話が残っているが、やはり最大の功績は270年近く続く「パックス・トクガワーナ」ともいうべき泰平の世を築き上げたことだ。今回はそんな家康の大胆さと慎重さについて、歴史学者・山内昌之氏が論じる。

豊臣家の悲劇こそ「論語なき算盤」の末路だ

渋沢栄一の凄さ
(1) 渋沢栄一と秀吉・家康(全2話)
対談 | 田口佳史／神藏孝之

令和の顔として注目される渋沢栄一には『論語と算盤』の著書がある。そのなかで彼は秀吉の長所と短所にふれ、そのがむしゃらな勉強ぶりをたたえつつ、古典の欠如を指摘している。一方、古典を幕府経営に取り入れたのが、徳川家康であった。

Confidential

【参考】

●徳川家康 年表

年代	家康年齢	主な出来事	説明
1333		南北朝時代開始	建武の新政
1392		南北朝時代終結	南朝が北朝に吸収
1467		応仁の乱開始	
1477		応仁の乱終結	
1534		信長誕生	
1537		秀吉誕生	
1542	0歳	**＜家康誕生＞**	天文11年12月26日　午前4時頃
			三河（愛知県）で松平広忠と於大の間に生まれる
1543		鉄砲伝来	
1548	6歳	**＜織田家の人質となる＞**	今川義元の人質となるため城を出て向かう途中、尾張の織田信秀に連れ去られる
1549	7歳	**＜今川氏の人質となる＞**	駿府の今川家の人質へ。父・広忠が暗殺される。太原雪斎に学ぶ（9歳～12歳）
			人質生活は尾張で２年、駿府で１２年ほど
		キリスト教伝来	
1551		信長の父、織田信秀が病死	信長が家督を継ぐ
1553		1度目の川中島の戦い	1553年～1564年
1557	15歳	**＜元服＞**	今川義元の姪、築山殿（つきやまどの）と結婚。今川家の軍師「太原雪斎」が死去
1558	16歳	**＜初陣＞**	今川義元の命により、織田氏に寝返った寺部城主・鈴木日向守を攻めた
1559	17歳	**＜長男・信康誕生＞**	駿府にて築山殿との間に信康（長男）が生まれる
1560	18歳	桶狭間の戦い	その後、服部半蔵は家康の旗本馬廻衆に所属
		＜長女・亀姫誕生＞	亀姫長女が生まれる
1561	19歳	**＜岡崎城に帰る＞**	今川義元が討死し、人質生活終了
		4度目の川中島の戦い	川中島の戦いの中で、もっとも激戦となった
1562	20歳	**＜織田信長と同盟＞**	清州同盟
1564	24歳	**＜三河一向一揆＞**	
1565		足利義輝暗殺（永禄の変）	第13代将軍足利義輝が、三好義継・松永久通らの軍勢によって殺害された
		浅井家と織田家が同盟	浅井長政と信長の妹「お市」が婚姻
1566		**＜三河国統一＞**	東三河・奥三河（三河国北部）を平定し三河国を統一
1567		**＜信康（長男）の結婚＞**	信康を、信長の娘である徳姫と結婚させる（共に9歳の夫婦）
		＜徳川氏に改名＞	
		斎藤家が滅亡	
1568		足利義昭、将軍就任	第14代将軍の足利義栄に代わって、将軍となる。室町幕府の最後の将軍。
1569		今川家滅亡	
1570	28歳	金ケ崎の戦い	織田家が朝倉家、浅井家を攻撃。織田家は撤退
		＜姉川の戦い＞	家康軍の善戦により織田・徳川連合軍が、浅井・朝倉軍に大勝利
		＜岡崎から浜松へ移る＞	浜松城を建設し、本城とする
1571		比叡山焼き討ち事件	同年、北条氏康、毛利元就、病死。
1572	30歳	**＜三方ケ原の戦い＞**	武田軍に大敗。この戦いの前から、茶屋四郎次郎家初代の清延（きよのぶ）は、家康に仕えている
1573		武田信玄病死	
		室町幕府滅亡	室町幕府が滅亡、朝倉家・浅井家の滅亡
1574		長島一向一揆を鎮圧	織田家、長島一向一揆への攻勢を強め、鎮圧する
1575	33歳	**＜長篠の戦い＞**	織田・家康連合軍で、武田勝頼を撃破
1578		上杉謙信急死	
1579	37歳	**＜三男・秀忠誕生＞**	秀忠、三男として遠江国浜松に誕生する
		＜築山殿殺害、信康切腹＞	武田家への内通疑惑がかけられた築山殿を殺害、信康を切腹させた（信長の命令）
1582		武田家滅亡	織田・徳川・北条の攻撃により武田家滅亡。この頃から大久保長安が家康に仕えるようになる
		本能寺の変	信長の死後、家康は、甲斐・信濃を奪い、5カ国の大名となる。伊賀越え
		山崎の合戦	秀吉が明智光秀に勝利。その後、清洲会議
1583		賤ケ岳の戦い	秀吉が柴田勝家に勝利。柴田勝家、織田信孝は自害
1584	42歳	**＜小牧・長久手の戦い＞**	豊臣軍を破る
1586		**＜浜松城から駿府城へ移る**	秀吉の妹・朝日姫と結婚。大阪城で秀吉に謁見。
1587		九州の役	秀吉が九州に侵攻し、島津軍を降伏させた
		バテレン追放令	秀吉、キリスト教宣教師を追放
1588		刀狩令	
1590	48歳	小田原征伐	豊臣軍により、北条家は滅亡。伊達家も豊臣秀吉に臣従し、事実上の天下統一
		＜江戸城に入城＞	
		秀忠、人質へ	秀忠が秀吉の人質のため上洛
1591		秀吉、太閤に就任	
1592	50歳	文禄の役	秀吉が1度目の朝鮮出兵。家康は参戦せず
1593	51歳	**＜藤原惺窩と面会＞**	藤原惺窩を江戸に招き、『貞観政要』を講じてもらう
		＜初代後藤庄三郎と面会＞	三代目後藤庄三郎にかけて家康の側近として使える
1595		秀忠が結婚	秀忠が、秀吉の養女・お江と結婚。
1596		慶長の役	秀吉が2度目の朝鮮出兵。家康は参戦せず
1598		秀吉死没	
1599		天海が家康の参謀へ	天海が朝廷との仲を取り持つようになる

Confidential

1600	58歳	オランダ船が漂着	豊後国にリーフデ号が漂着。家康は航海長のウィリアム・アダムスや船員のヤン・ヨーステンを厚遇
		＜関ヶ原の戦い＞	
1603	61歳	**＜征夷大将軍となる＞**	江戸幕府を開く
1604		家光誕生	秀忠とお江との間に家光が誕生（徳川将軍15人のうち、父親の正室の子は、家康・家光・慶喜の3人のみ）
1605	63歳	秀忠が第2代将軍就任	家康が将軍職を降り、秀忠が2代将軍となる。徳川家康は大御所へ。
		＜林羅山をブレーンへ＞	藤原惺窩の紹介で林羅山と面会。家康のブレーンとなる
1607		朝鮮通信使復活	
1608	66歳	**＜以心崇伝の幕政参加＞**	
1609		**＜オランダ商館開設許可＞**	朱印状による交易と平戸にオランダ東インド会社の商館の開設を許可
1611		保科正之、誕生	
1613		キリスト教禁止令	
		＜イギリス商館開設許可＞	朱印状による交易と平戸にイギリス商館の開設を許可
1614		大坂冬の陣	家康は自ら、大阪に出向き陣頭指揮を執る
1615		大坂夏の陣	豊臣家を滅ぼす
		武家諸法度・公家諸法度	武家諸法度や禁中並公家諸法度などを制定
		慶長から元和へ変号を変更	
1616	74歳	**＜家康病死＞**	４月17日に鯛の天ぷらにあたって死亡
1617		**＜東照大権現＞**	朝廷は東照社に「東照大権現」の神号を宣下するとともに正一位を贈位
		保科正之、養子となる	高遠藩主・保科正光の養子となる
1623		家光が第3代将軍就任	秀忠が、将軍職を嫡男・家光に譲る。秀忠は大御所へ
1629		保科正之が、忠秀・家光と初対	
1630		寛永の禁書令	キリスト教関連漢訳洋書の輸入禁止
1631		保科、高遠藩の藩主になる	
1632		秀忠死没	
1633		第一次鎖国令	
1634		第二次鎖国令	
1635		武家諸法度を改定	外様大名に参勤交代を命じる
		第三次鎖国令	
1636		第四次鎖国令	
1637		島原の乱	
1639		第五次鎖国令	ポルトガル船の来航を禁止
1651		家光死没	家綱が第4代将軍へ。遺言により、保科が家綱の後見人となる。

各種資料をもとに作成

Confidential

テンミニッツTV
https://10mtv.jp/lp/v21/?referer=kamikura_sasshi

歴代 徳川将軍一覧

代	氏名	在職	期間	出身家	享年
1	とくがわ いえやす 徳川家康	1603年 2月12日～ 1605年 4月16日	2年 2か月	安祥松平家	75
2	とくがわ ひでただ 徳川秀忠	1605年 4月16日～ 1623年 7月27日	18年 3か月	徳川氏	54
3	とくがわ いえみつ 徳川家光	1623年 7月27日～ 1651年 4月20日	27年 9か月	徳川将軍家	48
4	とくがわ いえつな 徳川家綱	1651年 8月18日～ 1680年 5月8日	28年 9か月	徳川将軍家	40
5	とくがわ つなよし 徳川綱吉	1680年 8月23日～ 1709年 1月10日	28年 5か月	館林徳川家	64
6	とくがわ いえのぶ 徳川家宣	1709年5月1日～ 1712年 10月14日	3年 5か月	甲府徳川家	51
7	とくがわ いえつぐ 徳川家継	1713年 4月2日～ 1716年 4月30日	3年 1か月	徳川将軍家	8
8	とくがわ よしむね 徳川吉宗	1716年 8月13日～ 1745年 9月25日	29年 1か月	紀州徳川家	68
9	とくがわ いえしげ 徳川家重	1745年 11月2日～ 1760年 5月13日	14年 6か月	紀州徳川家	51
10	とくがわ いえはる 徳川家治	1760年 5月13日～ 1786年 9月8日	26年 4か月	徳川将軍家	50
11	とくがわ いえなり 徳川家斉	1787年 4月15日～ 1837年 4月2日	50年	一橋徳川家	69
12	とくがわ いえよし 徳川家慶	1837年 4月2日～ 1853年 6月22日	16年 2か月	徳川将軍家	61
13	とくがわ いえさだ 徳川家定	1853年 11月23日～ 1858年 7月6日	4年 8か月	徳川将軍家	35
14	とくがわ いえもち 徳川家茂	1858年10月25日～ 1866年 7月20日	7年 9ヶ月	紀州徳川家	21
15	とくがわ よしのぶ 徳川慶喜	1867年1月10日～ 1868年1月3日	1年	一橋徳川家	77

各種資料をもとに作成

Confidential

テンミニッツ TV へのご登録、お待ちしております

「知の構造化」への挑戦

～ほとんどの問題は、既存の知識を正しく組み合わせることで、解決できる～

テンミニッツTV

https://10mtv.jp/lp/v21/?referer=kamikura_sasshi

知の巨人たちに学ぶ

よりよく生きるための「知の力」を身につける

変化の激しい不確実な時代には、様々な物事の「本質」を正しく俯瞰的に理解しておくことが重要です。しかし、SNS や無料動画サービスの普及などによって、世の中には信頼できない情報も多数飛び交っています。また、安直な解説では、「本質を捉える」ことはできません。

「本質」を正しく理解するためには、「本当にわかっている人」に聞くのが一番です。

テンミニッツ TV では、幅広いジャンルについて、それぞれのテーマの「第一人者＝本当にわかっている人」の講義を集積しています。だからこそ、「本質」を「的確」に、しかも「やさしく」、「鳥瞰的」に理解することができます。

テンミニッツ TV で「知の巨人たち」の着眼点や語り方を日々学ぶことで、自ずと以下の「知の力」が身につきます。

◆「**問う力**」＝物事の本質を問い、自分の見識を高め、教養を身につけていく力
◆「**組み立てる力**」＝「知識を構造化」し、現実にあわせて当意即妙に組み立てていく力
◆「**答える力**」＝当意即妙に組み立てた「教養」を、的確に伝え、活用していく力

「知の力」「情報の質」の低下や「メディア」の劣化が懸念される現代日本において、真に信頼できる「知の基盤」をつくりあげていくことが、死活的に重要ではないでしょうか。

ぜひテンミニッツ TV にご加入いただき、共に育て上げていただきたく、お願い申しあげます。

神藏孝之

●本件に関するお問い合わせ先

イマジニア株式会社 テンミニッツTV編集部

10mtv_tk@imagineer.co.jp

※ メール 回答時間 10:00～11:45，12:45～17:00（祝祭日を除く月曜～金曜）